

西に阿武隈山系、東に太平洋と、山と海に恵まれた福島県双葉町。自然豊かなその町の名を全国に知らしめたのは、皮肉にも2011年3月11日に発生した東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故による全町避難だった。

震災からこの3月で11年。その間、2020年3月にはJR常磐線双葉駅周辺と双葉町の一部の避難指示が解除され、立ち入りが自由化。常磐道常磐双葉インターチェンジが供用開始。そして、震災以来不通となっていたJR常磐線が全線開通するなど、うれしい出来事が続いた。

さらに2020年9月には、「働く拠点」として先行して整備が進められていた中野地区で、東日本大震災・原子力災害伝承館がオープン。隣接する復興祈念公園の一部が供用を開始した。続いて10月には双葉町産業交流センターがオープン。地区内の産業団地には建設業や製造業など20件の企業立地が決定。少しずつ、着実に復興への

歩みが進んできた。そして、この2022年。ずっと無人だったまちに、いよいよ「住む拠点」が整備される。10月の入居開始を目指して工事が急ピッチで進んでいる。

復興への新たな局面を迎えた双葉町を取材した。

復興を支えるガソリンスタンド

双葉町の大動脈、国道6号線。中間貯蔵施設へ除染土を運ぶダンプカーなどが行き交う傍らで営業をしているのが、ガソリンスタンドの伊達屋だ。まだ帰還困難区域でありながら、生命線である燃料供給のため、2017年6月に営業を再開。現在5代目を引き継いでいるのが吉田知成さんだ。

ふるさとへ戻る人、新たに住む人が 交わり集う「住む拠点」を整備

福島県双葉町 双葉駅西側地区
福島復興再生拠点整備事業

2018年●平成30年～

変わる日本の「暮らし」と「まち」

volume 114



阿部民子 text by Tamiko Abe

illustration by Shigeyuki Sakata

「震災当時に社長を務めていた父は、避難命令が出てもギリギリまで給油を続け、タンクローリーに灯油を積んで避難しました。ですから、双葉町の避難所はストロブが焚けて、あつたかかったんですよ。他の避難所にもタンクローリーに灯油を詰めて運んでね。最終的には、そのタンクローリー3台を、釜石、石巻に寄贈しました。当時、私は東京で仕事をしていたのですが、その様子を聞いて、伊達屋の名前を残したいと思ったんです。ちょうど、友人から『復興工事が始まるけど、燃料がない』という話を聞いて、準備に2年半ほどかけてオープンにこぎつけました」再開当時は、どこへ行くにもゲートで通行証を見せなければならず、人っ子1人いない静寂と暗闇だったまち。今では休日になると県外ナンバーの車が給油にくるなど、少しずつ復興へ向かっていくのを、肌で感じているという。昨年からは、実の姉が、産業交流センターのフードコートでファストフード店「ペンギン」をオープン。震災前に双葉駅前でも母親と祖母がやっていた人気店を引き継いでいる。

「双葉町の高校生のたまり場になっていた店でした。募参りや片づけなどでなく、その土地をどう使って、皆さんがどういう活動をして、どうにぎわっていかまで想像して、町役場の方と相談しながら仕事を進めています」

双葉町復興推進課の黒木アリシヤさんは「特に駅の西側地区は道路や住宅、また新たにつくる診療所など、関係者が非常に多い現場です。役場のマンプワーが足りない中、URさんには調整役も担っていただき、本当に助けていただいています。再生可能エネルギーの利用など、災害に強いまちづくりも進行中です。これからは、戻りたい、住んでみたいと思われれるまちをつくるって、にぎわいを起こす取り組みも仕掛けていきたい」と話す。

駅周辺では民間により、壁画に双葉町にゆかりのある巨大アートを描くプロジェクトも始動。ペンギンの名物店主だった吉田さんの母親の顔も描かれ、駅から降りる人を温かく迎えている。戻ってくる町民、新たに町民となる人々でつくる新しいまちが、今まさに動き出そうとしている。

帰ってきた人に、双葉感を感じてほしくて、姉に開店をもちかけました。懐かしいね、と人が集まってくれてね。10年経って、何もなかった状態から、あつて当たり前なのが1つずつ増えているのを実感しています。少しおこがましいですが、仕事をしているというより、地元を支えたいという思いでやっています」

戻りたい、住みたいまちづくり

東京電力福島第一原子力発電所の周辺自治体で、唯一すべての住民の避難が続く双葉町。初めての帰還住民を受け入れる「住む拠点」となるJR双葉駅西側には、86戸の住宅整備が決まっている。町民向け災害公営住宅30戸と、新たに町に移住する人も住める再生賃貸住宅56戸だ。6月以降には、この場所の避難指示が解除される予定で、10月の居住開始に合わせて、昨年12月から25戸の工事が始まっている。

復興へ邁進する町のパートナーとなつて事業を進めているのが、UR都市機構だ。これまで事業主体である町からの受託により、基盤整備と産業交流センターの設計・施工などの支援、双葉駅東側の駅前広場などの整備を行っ

常磐線特急列車からも駅周辺の変貌ぶりは窺える。



てきた。現在は、駅西側地区の造成や上下水道、道路などのインフラ整備に加え、8月に開庁予定の町役場仮設庁舎の設計・施工の支援にも尽力している。

UR双葉復興支援事務所復興の任にあつているのが、まちづくり整備第1課長の後藤亮だ。復興庁への2年間の出向を含め、双葉町復興支援の仕事について6年目。最初は、避難を続ける町民の苦労を思い、どう声をかけたらいいか悩んだこともあつたとか。

「本当に辛い経験をしているのに、皆さん、常に前を向いて明るいです。その姿に引つけられ、追いかけるが仕事に励んでいます。土地を整備するだけ

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社